

地域交流センター通信 21

March 2012, Volume 21

特集2

地域・故郷を思う

―東日本大震災と私たち―

(続編)



特集1

自然との出会いに心を向け
暮らしの伝統を見つめ直す

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

巻頭文：くらしを見直す多彩な証言

―北上山地の山小屋で3・11を経験する―……………今泉古晴……………4

特集1：自然との出会いに心を向け暮らしの伝統を見つめ直す

今日は谷（や）に（ラボの日）！

一緒に理科実験を楽しもう！……………山森美穂……………6

校舎裏の森にエンカウンススペース……………中込一雄……………8

北垣憲仁先生を通しての生き物たちとの出会い……………佐藤光雄……………9

観察会「野生小動物との出会いを楽しむ」……………天野未知……………10

ダーウィンが来た！生きもの新伝説

―激流に生きる―謎の水中モグラ―取材後記……………市原俊幸……………11

大学2号館で越冬するテントウムシ……………泉 桂子……………11

農の取り組みを地元小学生に発表……………崎田史浩……………12

大豆栽培を通じて、地域・社会に関わる

―固有種の大豆栽培ネットワークの取り組みとその社会的意味―……………田中夏子……………13

2011年度都留文科大学公開講座

「都留の自然と暮らし ―自然と共生したまちづくりのために―」が

開催されました……………

「生きもの地図作り」から地域を考える（『地域交流研究Ⅱ』）……………西 教生……………16

『地域交流研究Ⅲ』の新しい連携のスタート

―「やまなし観光力レッジ事業」との提携から―……………杉本光司……………17

大学周辺山林の森づくり調査……………泉 桂子……………18

夏のねたいり山の実習から……………西 教生……………19

イネのちからに感動！ ―田んぼクラブ便り―……………西本勝美……………20

第8回地域交流研究フォーラム…………………………21

特集2：地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―（続編）

未来を担う子どもたちのために

―震災を経験して、教育の原点を見つめ直す―……………森本晋也……………22

被災地における聞き取り調査から……………田中夏子……………24

チヨコレートがつなぐイラクと福島の子どもたち……………佐伯奈津子……………28

都留文科大学における放射能測定……………山本安夫……………28

東日本大震災後に想うこと……………野崎陽子……………30

本学合唱団が被災地支援コンサートを行なう……………清水雅彦・石川あゆみ……………31

東日本大震災津波被災資料デジタル化レスキュー……………日向良和……………32

「都留文科大学ボランティアセンター」の活動……………平林祐子……………33

被災児童と家族の心の支援を都留文大生と展開……………渡辺豊博……………34

トピックス

第14回「南都留地域教育フォーラム」を終えて……………立川 博……………37

市立図書館と都留フィールド・ミュージアムの連携事業…………………………38

「ついでにひろば」の旅行に参加して……………荒井翔哉……………39

くらしを見直す

—北上山地の山小屋で

多彩な証言

3・11を経験する—

■ 今泉吉晴

私は3・11大地震を岩手の山小屋で体験しました。初めて経験する大地震で、多くを学びました。余震は今も毎日あり、大地震は終わっていません。そこで今のうちに確認しておいた方がいいことがあります。一つは学んだことを忘れない、ということです。

まず私の場合ですが、大地震に揺れる山小屋は、聞いたこともない大きな音をたてたものの、しつかりたっていました。私の心配は、燃えるストーブだけでした。三回目か四回目の激しいゆれで、ストーブは傾いて足の一本で立ち、煙突にぶらさがり踊るようにまわりました。私は立つて軍手をはめた手でストーブの取っ手をおさえ、大きな揺れが続く間、そうしていました。

本震が収まったとき、私の大地震のイメージは変わっていました。ひどい音を立てたのは建物だけでした。森は泰然としていました。窓辺にやってきていたヒヨドリも、驟雨の時ほどにはあわてませんでした。でも私は、家が並ぶ町には大きな被害がでたのではないかと心配でした。ところが、防災放送は一言もいわず、電気、電話、インターネットもだめでした。

大きな余震がつづくなか、私は止まった水をなおしにできました。山小屋は気仙川の源流部である北上山地の尾根にあり、沢からパイプで水をひいています。水が止まっ

津波は昔からあり、対策がとられていたものの問題があったのです。多くの犠牲者をだし、数々の証言が語られています（どこにでかけても何か話したい、という表情の人に出会います）。

証言の多くが、津波から逃げる（距離と高度をとる）ことの大切さを訴えています。ある人は世界一の防波堤など関係ない、走って高台に逃げるべし、といました。危機には一瞬の油断もならない。自分の判断をすぐに実行するのがいい、という主張でした。

それでも津波にさらわれ、一命をとりとめた幾人もの証言者が、手にふれたものをつかんで助かった、といました。もうダメと覚悟を決めた時に、手のすばやい動きでつかめたものがあり、生還しました。

人々はまた、路傍で力つきた人に声をかけ、手をつないで高台にあげ、あるいは背負ってあがりました。そして、わずかに間に合わなかったための悲劇が語られています。

一方、原発事故は新種の災害でした。自ら判断し、手足を動かす機会は奪われたも同然でした。放射性物質は感知できず、どこが安全か、知りようがなかったからです。そこに政府から突如、避難指示がだされました。

もともと避難とは危険から距離をとる、という意味です。ところが、放射性物質の危険はどこまでも広がり、正確なありよう

たのは、沈殿槽がゆれてパイプが外れたからで、すぐになおりました。作業の間に私は、上の急斜面の表土（落葉と腐葉土の層）が地震でずりおちて、赤土が出ていることに気づいていました。

この表土の崩落は後日の余震によるものの方が多くなり、私はどんな地震も表土を落とすことを知りました（厳冬の今は霜柱による崩落が目立ちます）。谷に堆積した表土は有機物に富み、ミミズなどの土壌動物を育てます。夏も過ぎて私は、堆積した表土がヒミズ（小さなモグラ）の狩りの場所になったことを知りました。ヒミズは鼻を突き入れることができる柔らかな土にトンネルを掘ります。そして、土壌動物を捕らえて生きています。

堆積した表土はまた、沢の流れに浸食され、私の集水装置に入り、沢をくだって田に入りました。原発が放出した放射性物質で汚染された表土も余震で山の斜面を落ち、沢水によって田に運ばれたはずです。ヒミズは原発による環境汚染に集中的にさらされたのです。

翌朝（12日）、町にでかけた私は、役場の発電機で動くテレビで、気仙川を15キロくだった河口の陸前高田市が津波にさらわれる衝撃的な場面をみました。そして、帰途に国道沿いの食料品店が、高田の人々であふれるのを見ました。

はしれず、明快な距離のとり方があります。何より放射性物質の危険は永続します。人々の意見は分かれ、避難はいつ終わるかわかりません。

これでは「避難指示」という政府の言葉は、事実上「移住指示」です。じつさい、自分で避難を決めた多くの人の気持は「望まぬ移住」です。それに、たとえ汚染された土地がもともにとっても（あり得ない想定ですが）、その前に、各人の土地との関係と社会関係も変わります。

3・11大地震では、自力で逃げることもできた津波の災害から、危険が見定め難い原発事故まで、人間の災害のほとんどがみられた、といえます。その中で、人間が決めた原子力の利用は変更できることが共通認識になりました。そこで、3・11大地震の余震がつづく今こそ、しておいた方がいいことのもう一つは初心を忘れないことで、それも経験した人の声が代表しています。専門家の声はそうした声によりそうようで違い、過去の経緯からふりかえってみれば、次第に勢力を回復して経験した人の声を圧倒し、再び災害に通じたのです。小さな目立たないできごとをふだんから注視することが大切といよいよ分かってきました。

（いまいすみ よしはる・本学名誉教授、

本学地域交流研究センター初代センター長）



右手をあげ鼻を最高位にするヒミズ。
広いトンネルで鼻を上にあげて空気の流れと獲物の臭いをかぎとろうとするヒミズの姿です。



2011年3月11日午後2時54分
地震の最中のストーブ。揺れが一時おさまったところで撮影しました。このあと、ストーブをつかんで揺れから守りました。

自然との出会いに心を向け 暮らしの伝統を見つめ直す

特集1は、あらゆるものの源としての「自然」に注意力を与える実践、また地域の暮らしの営みに「自然」と共生する民衆的知恵の結実を見出し、いく実践、に光を当てました。そのような取り組みを紹介する地域の小学校との交流や、人と人とのつながりの再生に目を向けていこうとしました。

構成は、①化学、生き物など、「自然」の観察を小学生・市民と交流しながら進めている諸実践、②NHK番組「ダーウィンが来た！」の予告と2号館テントウムシの観察、③大豆など地域農業をめぐる交流、④公開講座「都留の自然と暮らし」、⑤地域交流研究センターのカリキュラム「地域交流研究Ⅱ、Ⅲ」、⑥森作りの調査と「田んぼクラブ」の実践、⑦第8回地域交流研究フォーラムの報告、というパートから成っています。

ところで「3・1」経験は、厳しい試練のなかで、改めて「自然」「地域」(暮らし・生業・文化)というものをよく意識させました。本誌8号(2005年8月)で今泉吉晴氏は、「私たちは、個々の動物や自然現象との出会いを楽しみただけではなく、それを通じて自然の全体をつかみ取るようとしています。」「自然とともに働いた歴史に学ぶ」と述べていますが、特集1は、私たちの、「自然」「地域」(暮らし)をよく知ろうとする模索でもあるわけです。その意味で本特集は、特集2とも響きあう関係にあります。

子は学生たちの感想と写真をご参照ください(私は2枚目の写真がとくに気に入っています)。この谷二ラボでの子どもの関わりは、教育実習やSAT(学生アシスタント・ティーチャー)とはまた違った質のもののようにです。

私の感想としては、学生たちの「子どもたちを喜ばせたい」という熱意とそのためのアイデアの豊富さに、毎度感心させられます。一方で、実験内容の本質的な理解と理解しようとする意欲が、正直なところまだ物足りません。子どもたちが実験中に気付いたことや疑問をさらに伸ばしていけるような対応ができるように、この点にも意識的に取り組んでもらいたいと思っています。

一緒に取り組む実験

(織邊詳子 おりべみつこ 初等教育学科4年)

初回の谷二ラボでは、液体窒素を使って物質のさまざまな状態変化を見ました。液体窒素は私たち大学生にとっても身近でないもので、谷二ラボを計画するうえで安全面についてとても気を遣いました。普段は絶対に体験できないマイナスの世界で、大学生と小学生がともに実験結果を予想し、興味を持って実験し、結果に感動することができました。私たちが指導するというよりも、皆で楽しみながら疑問を解明していく実験教室にすることができたことが良かったと思います。

十を知って一を教える

(櫻井将人 さくらい まさと 初等教育学科4年)

私自身が液体窒素を用いた実験に興味があ

今日は谷二(やに)ラボの日！
一緒に理科実験を楽しもう！

■山森美穂

初等教育学科自然環境科学系化学ゼミでは、谷村第二小学校で放課後、子どもたちと学生が一緒に理科実験をする活動「谷二(やに)ラボ」を始めました。布石となったのは、自然環境科学系を中心に平成21、22年度に大学構内で実施した市民公開講座「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」です。化学ゼミも講座のひとつを担当し、内容の選定や準備、当日の進行の大部分を学生たちが行ないました。そして、



いよいよ液体窒素が登場(第1回)



巨大シャボン玉、成功!(第2回)

り、子どもたちにも体験する機会をと思い、第1回のテーマを提案しました。空気の入った風船をマイナス19.6℃に冷やすとどうなるのだろうかといった質問を投げかけたときの、子どもたちの真剣に考える姿が印象的でした。現象の仕組みを子どもたちにわかりやすく説明するために、多くのことを調べたり考えたりしたこと、とても有意義でした。

子どもたちの笑顔が嬉しい

(杉山実穂 すぎやま みほ 初等教育学科4年)

第2回谷二ラボでは、普段なかなか体験することのできないシャボン玉遊びを子どもたちにも体験させてあげたいと思いました。「巨大シャボン玉の中に入る」を成功させるために市販のシャボン液よりも強度の強いものを作るのに非常に苦心しました。当日、計画通りに進めることができず、反省することは多々ありましたが、子どもたちの輝くような笑顔を見て、この題材を取り上げてよかったと思います。

学校現場で活かしたい

(佐藤和馬 さとう かずま 初等教育学科4年)

私は第3回谷二ラボの入浴剤づくりで、低学年の子どものグループに入って活動しました。スムーズに進行できるように、学年によって製作過程を変えるなどの工夫をしましたが、それでも時間がオーバーしてしまったことが反省点です。しかし、子どもたちが笑顔で和気藹々(わいきあい々)と作業する姿を見られたことはとても嬉しかったです。良い教材を作るためには、何度も試行錯誤

もつとやってみたいという声があがりました。

「教員になったら、実験を多くとりいれた理科の授業をしたい」と考えている学生は大勢います。しかし、小学生とともに実験する機会が勿論、そういう想定の実験授業ですら、限られているのが実状です。それに、学生たちは「小学生と一緒に」となるとよく勉強するのです。専門科目の実験にももっとやる気出してよ、と苦笑しつつも、学生の自然科学に関する素養を高める動機付けになるのではと私も感じていたところでした。

また、大学に来てもらう形での実験教室には、参加者集めに苦労したこともありましたが、ここから「小学校に出向き、ある程度定期的に開催」という構想が浮かびました。谷村第二小学校に打診したところ、校長・教頭先生も「双方にメリットがある」と受け入れてくださいました。

初年度の今年は6月29日、8月10日、11月21日に実施し、2月にもう1回予定しています。各回の様

誤し、子どもに何を伝えるのか明確にしていることが大事だということを改めて学びました。

「楽しむ」と「学ぶ」

(高橋孝明 たかはし たかあき 初等教育学科4年)

私は第3回谷二ラボで高学年の指導を担当しました。子どもたちは皆飲み込みが早く意欲的で、自分好みの入浴剤を作ろうと頭を捻(ひね)っていました。子どもたちの積極的な姿から、「楽しんでもらう」ことは達成できたと実感していました。その後、谷二ラボで覚えたことがテストで役に立ったという話を聞き、楽しむだけでなく学ぶ機会になったことが嬉しかったです。

小学校と教育委員会への打診にあたり、地域交流研究センター長の杉本光司先生と都留市教育研修センターの志村達男先生には仲介の労をとっていただきました。今年度の活動は都留文科大学特別教育研究費の助成を受けました。ここに記して感謝いたします。

(やまもり みほ・本学初等教育学科教員)



入浴剤の材料を正確に計り取ります(第3回)



校舎裏の森に エンカウントースペース

■ 中込 一雄

本校の校区には、山々に囲まれた豊かな自然が残されています。平成22年4月に本校に赴任し、この豊かな自然を教育活動に活かし特色ある学校づくりを進めたいと考えていました。そんな折り、本校佐藤光雄教諭から、校舎裏でリスが倒木の上を歩いていたという情報がありました。また、校舎の換気扇にムササビが営巣したことがあるという情報も寄せられました。それなら、巣箱や餌台を作れば、子どもたちと野生動物とのエンカウントースペース（出会いの場）ができるのではないかと考えました。

早速7月に佐藤教諭と子どもたちで餌台を作り、校舎裏の森に設置し、クルミやヒマワリの種を置きました。10月にはムササビ用の巣箱を設置し、クルミも植樹しました。着々とエンカウントースペース作りが進みました。後は、動物が現れるのを待つだけです。クルミやヒマワリの種が確実になくなっているの、動物たちが来ていることは確かでしたが、出会うことはありませんでした。

年が明けた平成23年2月のバレンタインデーの日に、素敵なプレゼントがありました。ムササビが巣箱から顔を出しているではありませんか。子どもたちとともに愛くるしい姿をじっと観察しました。

新年度を迎え、都留文科大学の北垣憲仁先生に全面的に協力していただき、身近な動物の学習とエンカウントースペース作りをすることにしました。

北垣憲仁先生を通しての 生き物たちとの出会い

■ 佐藤光雄

今年度、総合的な学習の時間に都留文科大学の北垣憲仁先生を招聘して、本校の裏山に生息するムササビ・リス・ネズミ・モグラの学習を行いました。大学の先生との学習を前にして、子どもたちには若干の緊張感が見られ、多少の不安がよぎりましたが、そんな思いはすぐに消えてしまいました。小動物の画像・動画、モグラの剥製を見ることから生き物への興味・関心が高められ、実物を自分の目で見たいという思いの高まりが、子どもたちの学習プリントの内容からも伝わって来るようになりました。指導者と子どもたちとの距離が縮まれば、授業はうまく行きます。次の授業では、ムササビの剥製を見ながらムササビについて詳しく学習し、自分たちができることを考え、取り組むようになりました。ムササビ用の巣箱・リスやネズミの餌台を取り付け、観察日誌を付け始めました。

観察日誌から、クルミやヒマワリの種が減っていることは確認できましたが、子どもたちが小動物そのものを昼間に見ることはなかなかできない日々が続きました。そこで、北垣先生が赤外線カメラを設置して、画像を授業で見せて下さいました。子どもたちからは驚きと喜びの声が挙がりました。クルミをくわえて走るネズミ、そして思いがけないムササビの姿もありました。

学校の裏山という身近な所でも、私たちはその姿

6月、7月、9月、10月の4回学習を行ない、動物撮影用のカメラも設置しました。回を重ねる毎に子どもたちの学習に向かう姿勢が意欲的になり、北垣先生が来るのをとても楽しみにするようになりました。4回目のカメラ映像の確認で、ムササビやクルミをくわえて走るアカネズミの姿が映し出されると、子どもたちは大きな歓声をあげました。

今後、4年生が続けてきた学習や観察は新しい4年生に引き継がれます。2月に現4年生が3年生に観察結果を伝える引き継ぎの会を行います。校舎裏のエンカウントースペースは本校の宝物です。これから毎年新しい4年生がエンカウントースペースでの観察を続けていけるようにしていきたいと思っています。

（なかごみ かずお・都留文科大学附属小学校校長）



リスや野ネズミに出会えるようにクルミを植樹する様子



野ネズミの観察装置を設置する子どもたち

をなかなか見ることはできませんが、生き物は生きており、その命を次の世代に伝えていることを感じました。

先日、雪の降った日にムササビが今年初めて巣箱から顔を出しました。子どもたちも大喜びです。単眼鏡と望遠一眼レフカメラをセットし、観察の準備をしました。もうすぐ5年生に進級し、この学習は一段落しますが、その前にもう一度ムササビ、そしてリス・モグラにも姿を現して欲しいものです。

（やうつ みつお・都留文科大学附属小学校教諭）



自動カメラに写ったクルミをくわえるアカネズミ

子どもたちの学習感想

今日、ネズミやリスやムササビやモグラのことをいろいろ知りました。裏山探検をして、リスが食べたクルミやネズミが食べたヒマワリの種、モグラの穴など、いろいろ見つけれました。すごく楽しかったです。ありがとうございました。

（4年S・T）

写真にムササビやネズミが写っていて、びっくりしました。モグラが来るように、土を掘って中にヒマワリの種を入れてガラスを置きました。モグラが来たら、見てみたいです。世界で一番小さいモグラの剥製を見てびっくりしました。これで大人だっことを知らなかったから、もっとびっくりしました。さわったら、ちくちくしていました。

（4年K・K）



観察会「野生小動物との 出会いを楽しむ」

■天野未知

12月10日の午後、私たち動物園職員と都立動物園友の会のメンバー合計19名が都留文科大学に集まりました。北垣憲仁先生に講師をお願いした観察会のスタートです。自己紹介の後、先生を先頭に裏山（大桑山）に入ります。最初に見つけた「だれかが食べた杉の実」をきっかけに、みんな「山の宝物」をさがすのに夢中になりました。芯だけになったマツボックリ、丸い穴があいたクルミなど、先生にコッスを教わるといういろいろな宝物が見つかりました。そして、いよいよ出会いを楽しむ時間です。積み上げられた丸太が観察ポイント。日が暮れ、足下から深々と冷えてくるなかで、鼻をすする音にも気をつけながらアカネズミが出てくるのを待ちます。そして幸運にも10分ほどして丸太の間で小さな陰が動きました！

この観察会を実施した理由は二つありました。一つは私たちの動物園で「ちゅうげつ 菌類展」という特設展示を開催しており、野ネズミの観察会をやりたいことが、もう一つは北垣先生が取り組んでいらっしゃるエンカウンスペースづくりに興味があったからです。動物園は自然への窓口ともいわれます。私たちが行なっている教育普及活動も、動物への関心や興味が動物園内にとどまらず野生動物や実際の自然まで広がること、それがきっかけとなって来園者と自然の間に新しいつながりが生まれるこ

とをねらいとしています。そこで北垣先生の取り組みを一般の方にも是非知ってもらいたいと考えたのです。

プログラムの後半は山で拾った宝物を見せ合い、先生から宝物を作り出した動物たちの紹介がありました。お話の間も、建物の裏に作られたエンカウンスペースにアカネズミが出入りする様子をモニター越しに確認でき、参加者から歓声があがりました。寒い日でしたが、フィールドサインをさがしながらの山歩きや動物観察をゆつくりとじっくりと楽しむことができました。庭にエンカウンスペースを作りたいという参加者の方もおり、観察会の手応えを感じました。

最後に大変お世話になった北垣先生と、温かいおでんを作ってくださいました学生のみなさんに心から感謝いたします。ありがとうございました。

（あまの みち・井の頭自然文化園教育普及係）



NHK 3月18日に放映予定

ダーウィンが来た！生きもの新伝説 〜激流に生きる！謎の水中モグラ〜

取材後記

■市原俊幸

大迫力の映像とともに誰も見たことのない生きものたちの世界をお伝えする「ダーウィンが来た！生きもの新伝説」（NHK総合 毎週日曜夜7時30分より放送）。

◇

今回、番組では日本の溪流に暮らす「カワネズミ」の撮影に挑戦しました。名前に「ネズミ」とつきますが、じつは「モグラ」の仲間。しかも水中を巧みに泳いで魚を捕らえるモグラなのです。撮影は都留文科大・北垣憲仁先生のご協力のもと、都留市を流れる鹿留川を舞台に行ないました。

カワネズミは観察が極めて難しい生きもの。①おもな活動は夜、②移動はつねに水のなか、③何より動きが「超」俊敏。撮影に際して乗り越えなければならぬ壁はいくつもあります。

北垣先生に番組化を相談してから、実際に撮影に取り掛かるまで「3年」。先生がカワネズミの行動パターンを綿密な観察を通して調べ上げ、その情報をもとに私たちは撮影のプランを練り上げました。暗闇でも映像が撮れる「赤外線カメラ」をはじめ、

撮影には20台以上もの最新カメラを準備し、24時間体制で撮影に臨みました。

先生がもつカワネズミへのあくなき探究心、そして地域交流研究センターの皆さんの暖かなご支援のおかげで、数々の貴重な映像の撮影に成功しました。本当にありがとうございました。

※番組を見逃した方も

「NHK オンデマンド」で3月19日（月）〜4月1日（日）のあいだご覧になれます。

（HP <http://www.nhk-ondemand.jp/>）

（いちばら としゆき・NHKエンタープライズ 自然科学番組）



カメラモニターを見つめながら、カワネズミの登場を待つ。（左筆者）

大学2号館で越冬するテナントウムシ

■泉 桂子

私がテナントウムシの越冬を知ったのはもう20年以上前、大学の同輩だったO君のおかげでした。彼は大学近くの団地などで集団越冬しているナミテナントウの模様と数をカウントし、「何かの擬態である」という仮説を検証しようとしていました。ほんの些細な出来事ではありますが、彼の姿は自然と真摯に向き合うことの意義を教えてくださいました。

昨年12月14日、朝大学へ登校すると、2号館で大量のテナントウムシが死亡、もしくは麻痺した状態で見つけました。以前からこの問題は一部の教員などに知られていましたが、議論のためにはデータの積み重ねが必要だと感じました。そこで清掃の方のご協力を得、まだ屋外に放逐されていた二〜六階の弱った虫たちを試みに集計してみました。その結果は『フィールド・ノート』最新号（71号）をご参照ください。カメムシやハエ、カが一ヶ台であったのに対し、死亡または著しい運動能力の低下がみられたテナントウムシは約4600匹に上りました。

本学で私が担当している農林業・農山村の基盤の一つは生物多様性にあります。春までのひととき、小さな命に越冬の場を提供することは不可能ではないと考えます。

（いずみ けいこ・本学社会学科 環境・リミニティ創造専攻教員）



自然科学棟外階段
3F 机横のブロック
2012.2.8
撮影者：今泉圭一郎
（地域交流研究センター職員）



食べ痕など森で拾った宝物を見せ合う



森のなかで動物たちの暮らしの痕跡を探す参加者



農の取り組みを地元小学生に発表

■ 嶋田史浩

2011年11月18日、谷村第一小学校を訪問し、都留の農や地産地消をテーマに活動をする大学生数名が小学生を相手に活動発表を行いました。こちらの小学生は、授業の一環で「地産地消、食育」をテーマに学んでおり、その参考として実際に都留で「水掛け菜」や「アオハタ大豆」を題材に活動する私たち大学生の試みを発表することになりました。

小学生の授業の目的は、都留の特産品を知り、学ぶことです。地元の食材を用いたお弁当や朝食づくりを最終的な目標として、すでに校庭内にて水掛け菜の栽培に挑戦していました。また、理科室ではヤマメが飼育されていました。どちらも子どもたちが日々の観察や記録を続けており、指導には都留市十日市場で養魚場を営む柴崎利春さんがあたっていました。今回の発表も柴崎さんにお誘いを受けたのがきっかけです。

当日は、大学生からは環境・コミュニティ創造専攻独自の講義「プロジェクト研究」でアオハタ大豆の栽培を通して地域との交流に取り組みチームと都留の特産品を開発することを目的にアオハタ大豆クッキーや水掛け菜うどんを創ってきたチーム、それに水掛け菜の生産・加工・販売を手掛ける学生団体「和み菜家」が発表に臨みました。

私は、プロジェクト研究で取り組んできた「大豆生活」の内容として、主にアオハタ大豆の栽培の行程から収穫した大豆で味噌づくりを体験した様子を発表しました。「大豆生活」としては、自分たち自身がこれまで大豆を通して都留で色々な学びを得て

きたぶん、今度は発信へと切り替えていきたいと考えていました。そのため、今回のような発表の機会是非常に嬉しかったのですが、一方で小学生にどのように発表しようか試行錯誤しました。

やはり、大豆がどのようなものを感じ取って欲しいと考え、当日は一般的な白大豆とアオハタ大豆の種をサンプルで一人ひとりに配ることにしました。これが思いのほか好評だったように思います。そうして、発表のはじめには大豆が日常の食卓にあるさまざまな食品と関わりが深いことを再確認したあと、大豆が種を蒔いてからどのように育っていくのかを実際の栽培の経過写真で見てもらいました。

子どもらは、授業のなかですでにアオハタ大豆や水掛け菜について勉強していたようで、質問も活発に飛び交いました。とくに、水掛け菜は栽培途中ということもあり、水掛け菜については多くの質問が挙がっていました。

これまで地元の人が都留の特産品をどのように見ているのか知る機会がなかったので、地元の子どもたちが都留の特産品に目を向ける様子に触れてみて、地元の人と大豆について考えてみるのも面白そうだなと思いました。自分たちが大豆を栽培する経過で、地域の多くの方と関わりを育んできて得たネットワークや経験を、今度は地域に伝えたり、地域のひとと一緒に考えてみたいとの新たな目標も生まれました。今回の地元の子どもらとのつながりを大事にして、世代を超えて、お互いが地域のことを学び合える機会を持ちたいと思います。

(さきた ふみひろ・社会学科

環境・コミュニティ創造専攻3年)

農と食について考え、行動することを提案なさっています。

萱場さんには、その前の週、別の講義の中で、「農業との出会い」やご自身の農法を確立するまでの試行錯誤についてお話をいただきました。建築関係の仕事から、神奈川、山梨での生活協同組合づくりを経て、「人生最後のステージに今までの経験を活かそう」と、鳴沢村で多様性を大事にした農業に取り組む傍ら、県内のNPOと連携しながら「農」を核としたネットワークづくりを進めてきたと言えます。その一環として、今回は「大豆一坪市民参加」の仕組みを中心にお話いただきました。

「二坪市民参加」では、「赤大豆」という品種を扱いますが、草取りボランティアによる援農ではなく、市民がわずかずつではあれ、自ら生産行為を担うことによつて、農家の取り組みを支える仕組みです。三〇四年かけて形質を固定し、安定的な作物になった段階で今度は様々な加工に挑戦すること。そのため、市民と生産者で構成する組織「まめのえん」を結成しました。まとまった規模ではなく、市民農園に取り組む消費者が、自分たちの畑の輪作に組み込んで少しずつ、丁寧に作るという作戦。すでに30人が協力者として手を挙げています。

本学習会では、大学近くで、大豆栽培を予定している市民の方々と、前号で紹介した学生団体、「農ネット」のメンバーも参加し、なぜ大豆栽培が農や食を守ることにつながるのか、生産者と生活者・消費者との豊かな関係とは何か、そして大豆栽培のネットワークづくりがもつ社会的力とはどのようなことか、栽培する上での技術的なアドバイス等、具

体的なお話から始まって、地域社会づくりの手法としての有効性にいたるまで、幅広いお話と質疑がなされました。

(たなか なつこ・本学社会学科

環境・コミュニティ創造専攻教員)



ヤマメの飼育・観察方法について説明する柴崎利春さん(中央正面)



学生たちが使用したプレゼンテーション資料



大豆栽培ネットワークの取り組みについてレクチャーする萱場和雄さん



2011年度 都留文科大公開講座

「都留の自然と暮らし」自然と共生したまちづくりのために」

(主催・地域交流研究センター) が開催されました。

第1回 (11月12日)

カワラナデシコの咲くまちへ」都留市におけるカワラナデシコの分布と現状

講師 坂田有紀子 (本学初等教育学学科教授)

第2回 (11月19日)

自然災害から身を守るために」都留の自然災害危険度

講師 中井 均 (本学初等教育学学科教授)

第3回 (12月3日)

地域は本物と出会える生きた博物館」都留の自然と人びとの暮らしの知恵に学ぶ

講師 北垣憲仁 (本学地域交流研究センター特任准教授)

第4回 (12月10日)

地産地消の観点から作成した豆腐キットの実際

講師 吉住典子 (本学名誉教授)

「都留の自然と暮らし」を見つめる公開講座が開催され、総計74名の方が参加されました。この公開講座は、県内11大学が参加する「大学コンソーシアムやまなし」による県民コミュニティカレッジ講座として開かれたもので、2011年度のテーマは「未来のゆくえと私たちの日常を見直す」というものです。

以下に、「アンケート」用紙に記入された参加者の声を抜粋して掲載します。なお「第4回」はアンケート

ト対応様式が異なっていましたので記事にすることができませんでした。講演の概要を写真の下に記しておきます。

「カワラナデシコの咲くまちへ」(第1回)

「私は、地元にてカワラナデシコを見たことはなかったんです。ただ、見逃していたということもあるでしょう。都留でナデシコの大群を見たときは、本当に心おどる気分でした。一昔前

都留市も防災を真剣に考えなければいけないと感じました。都留市の地震など、データがなかったのですが、本日教えていただき参考になりました。」

(60歳代・男性)

「私たちの住む都留は自然災害(山、川、がけ崩れ、水害)には極めてつよいと思っていました。地震は、活断層にかこまれていっていると聞き、とても不安です。避難所も安全とは言えない箇所があると聞き、いっそう不安をかきたてられました。色々な災害があることを詳しく説明してくださり、つよい味方となりました。」

(70歳代・女性)

「地域は本物と出会える生きた博物館」(第3回)

「自然からの学びということですが、いつも、そのとき、その場にて、人として感動と生きる力を与えていただいています。都留に限らないことですが、人の知恵は自然からの恵みです。今の文化はすべて自然からの発想だと聞いています。自然を知る、自然から学ぶことを生きる根本にしたいと思いました。」(50歳代・女性)

「地域交流研究センターやフィールド・ミュージアム(部門)を紹介する資料(冊子、マップ、機関誌)などの実物の紹介、展示などがあればよいと思いました。都留市の自然(里山など)から生まれた絵本などの紹介(展示)があればいいなと思いました。身近にいながら普段は気づかない小さな命(動物や植物)の暮らしを意識すると、人間も自然にやさしい、ていねいな暮らしができると思いました。都留フィールド・

には、この美しい大群が普通であったということも衝撃です。ぜひ未来へと残していきたい光景です。」

(20歳代・女性)

「カワラナデシコは古くから日本人の心情、感性をとらえたすばらしい花だと思います。都留市のまちづくり事業の中心的な分野の一つに加えられるように運動を進められたらいいと考えます。そのためには、幅の広い分野の活動家や団体・組織などに呼びかけをすることが必要です。たとえば保育園、学校、協同のまちづくり推進会、都留市環境保全市民会議、都留市民生委員・児童委員協議会、など。」

(70歳代・男性)

「地域の方々の経験や知識がたいへん豊富で、自分たちが知らない知識を得ることができて、改めてカワラナデシコについて考え、興味深く話し合いに参加できてよかった。地域の方の協力や、カワラナデシコに対する熱い思いが伝わって、素晴らしいなと思います。感動いたしました。地域・町ぐるみで長い年月をかけて植生をさえていき、またそれを使って小学校などの教育面でも生かしていきたい、という話を聞き、自然を愛する心を育てるのは大切であるなと思いました。」

(20歳代・男性)

「自然災害から身を守るために」(第2回)

「都留で起こりうる自然災害の危険性を学ぶことができて、考えさせられました。私の家は断層の上!?このような身近なテーマで大学の研究者の先生に講義を分かりやすくしていただいて、受講してよかったです。」

(60歳代・女性)

「いろいろな、火山や地震の例を示してくださり、



生活環境科学ゼミでは、国が提唱している食育の一環である「地産地消」をテーマとして研究を続けています。昨年度は都留市内の食関連の生産物を調べ、その生産物を使ったレシピ集を作成しました。その中で大学発の特産品として「手作り豆腐キット」を作成しました。それには、都留市特産の「あおはた大豆」および「水かけ菜パウダー」を利用しています。今回は手作り豆腐を作ります。また、当日はおからのレシピを記載した「しおり」も配布する予定です。



「生きものの地図作り」から
地域を考える（『地域交流研究Ⅱ』）

■西 教生

地域交流研究Ⅱの授業では「生きものの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものを対象に分布調査を実施しました。2010年は楽山公園やムササビの森を調査地とし、タンポポ、ウマノアシガタ、スミレ類、アオキ、シユロの5つを調べることにしました。まず、受講生にはこの5つのなかから興味のあるものを選んでいただき、10個のグループを作ります。調査やまとはグループごとにおこないます。調査では決められたコースを定期的に歩き、花や株の数、場所、高さなどを記録しました。調査の



ムササビの森での調査風景



展示パネルを作製する

さいには事前に用意した簡易図鑑を配布。生きものの地図を作るにあたっては対象とした種の識別と、その生きものがいつ、どこに、どのくらいあったのかを把握することが大切になります。つぎに、調査から得られたデータをまとめます。これは、自分たちが取ったデータから何がわかるのかを知るのと同時に、何がわからないのかを考える時間でもありました。まとめと並行して発表用の資料（パネル）を作製。グループで共通の物事を考える作業では、一人では思いつかない発想が生まれることがしばしばあります。また、同じデータをほかの人がどのように見ているのかといったことに想いを巡らす機会にもなるでしょう。調査から、タンポポ、ウマノアシガタ、スミレ類は季節によって花の数や高さがどう変わるのか、シユロとアオキはどのような環境に生えているのかが明らかになりました。発表は授業内でグループごとにおこない、その

『地域交流研究Ⅲ』の新しい
連携のスタート

―「やまなし観光カレッジ事業」との提携から―
■杉本光司

本学カリキュラムの「地域交流研究Ⅲ」は、昨年度までは、社会学科の専門科目「地域学」との同時開講科目として設定され、また、山梨県観光部の「山梨魅力メッセンジャー事業」との連携により、山梨の風土、歴史、産業等を学びながら、自分の生活を見直すとともに、山梨県の魅力を広く報せる「山梨魅力メッセンジャー」の認定を受けることができる科目でした。

しかし、今年度は、「地域学」との連携はなく、地域交流研究センターにおける教養科目として開講することになりました。また、新たに山梨県観光部の「やまなし観光カレッジ事業」との連携が始まりました。この科目は、下記に示すように、10回の講座、2回のフィールド・ワーク、そして1回以上のイベント・ボランティア参加という3つの要素から構成されています。

受講者数は110名でしたが、山梨県による修了認定の条件となります。①7割以上の講義の出席、②1回以上のフィールド・ワーク参加、③1回以上のイベントボランティア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という4つの条件をクリアした、「やまなし観光カレッジ」修了認定者は、受講者の8割、87名にもなり、「山梨魅力メッセンジャー事業」との連携時代も含め、最大の人数となりました。とくに、今回からは、地域で開催されるイベントへのボランティア参加という条件が加わっ

日 程	テ ー マ	講 師	備 考
10月6日	開講式、授業ガイダンス	杉本 光司	
10月13日	山梨県の概要	横小路 稔	山梨県観光部
10月20日	山梨の歴史	小畑 茂雄	山梨県立博物館
10月27日	観光と地域活性	佐藤 あづみ	(財)キープ協会企画部
11月10日	富士北麓の地域振興	小佐野 常夫	前河口湖町長
11月17日	山梨と富士山	横尾 幸江	ひめねずみ社
11月24日	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園
12月1日	郡内織物の新しい挑戦	前田 市郎	甲斐絹座(前田源商店)
12月8日	都留の自然	西 教生	都留文科大学非常勤講師
12月15日	だっちもねえこんいっちょし	五緒川 津平太	作家(本名:大堀卓)
12月22日	甲州印傳	上原 勇七	(株)印傳屋上原
1月12日	まとめ	杉本 光司	

日 程	方 面	視 察 先
11月12日(土)	郡内地域	山梨県環境科学研究所、山梨県立富士ビジターセンター、富士吉田歴史民俗博物館、都留市尾県郷土資料館
12月3日(土)	国中地域	かいてらす、山梨県立博物館、大日影トンネル、シャトー勝沼

たため、「ヴァンフォーレ甲府のホームゲーム」、「甲州かぼちゃ祭り」、「山梨よっちゃばれ祭り」、大学の「いこいのひろば」等への運営スタッフとして、また、大学近くの「寺川河川清掃作業」にも参加する等、多くの学生が工夫して山梨県内各地でボランティア活動を行ないました。1月25日には、加藤祐三学長、山梨県観光部の方々の出席を頂き、山梨県による修了認定証の授与式が開催されました。受講者の感想の多くに、山梨県で生活しているながらも何も知らなかったという現実と、山梨に関する多くの魅力を発見でき、山梨がとても好きになったという言葉が綴られていました。

(すぎもと てるじ・本学地域交流研究センター長)



都留市尾県郷土資料館



鉄道トンネルの跡地を利用したワインカーブ(大日影トンネル)



(にし のりお・本学非常勤講師)

後、意見交換をしました。野外調査から知識を手にすることは、書物などを介した学びとは違った尺度の価値があります。得られた情報を地域に公開するために、作製したパネルは8、9月にかけて都留文科大前駅の待合室に展示しました。受講生からは「授業で調査をしたことから楽山公園をよく歩くようになった」、「これまでよりも意識して花を探すようになった」という感想が寄せられました。生きものを見る・知る楽しさは、どこか遠くの自然のなかだけではなく、私たちの地域にも多くあります。足元の自然に目を向けることは、結局は世界を見ることにも繋がっていくことでしょう。授業を通して地域の生きものの情報を定量的に記録し、発信していく体制が整えられたらと考えています。



大学周辺山林の森づくり調査

地域交流研究センタープロジェクト「大学周辺山林における次世代の森づくりに関する調査」では、大学近くの山林にて森林の動態を調査研究しています。今年度は九月五日〜八日にやまびこ競技場近くの森で例年どおり、九名の学生と二名の教員が樹木の調査を行いました。教員からのコメントと参加者の感想を紹介します。

泉 桂子

◇

参加された学生の皆さんは九月初旬の厳しい残暑のなか、体力の限界とも思われる過酷な実習を黙々とこなしてくれました。その中で彼ら・彼女らは多くのことを自ら学び取ったようです。

まず多かったのは「下草の繁殖力と力強さ」への驚きです。「1年間ほぼ下草刈りが行なわれていなかった森の地面は下草に覆われており、杭を探すのに苦労した。このことから間伐に並び、下草刈りが重要視される理由がわかった」、「毎年手を加えていてもすぐに人の進入を拒むまでに植物は生長する」などの意見がありました。

次は何といっても山での体力消耗の速さです。「その場に立ち止まってもすぐ体力を使った。(中略)林業の作業はもっと枝打や間伐など危険な作業をしているので実際はさらに厳しい仕事である」、「森林の維持管理は本当に大変なことなのだと感じ

た。(中略)林野庁や森林保護の活動を行なっている方々には心から頑張ってもらいたい」などの意見です。

その中で今後の研究・調査につながる気づきもありました。「単位を諦めなかったのは(中略)発見や楽しみがあつたからかもしれない。(中略)木から塩がとれること、この木は鳥が食べるから伐っちゃダメ等」と、実習の合間、樹木に興味を示す人もいました。また、「傾斜角を測っていたコンパスは、主に工事現場の基礎や下請け作業を行なう際に角度が均一に保たれているかチェックをする際に用いられている(中略)樹高測定器は(中略)使い方も簡単なため学生が調査に使っている場合もあり、とても汎用性がある」など、普段触れることのない道具に関心を寄せる声もありました。「自ら一次データを取ることを大変さとデータの貴重さ・重要さ」に言及した学生は必ずやこのことを卒業論文執筆の過程で思い出すことでしょう。「初対面の先輩方が多く、正直上手くやっていたり不安だった。(中略)実際に作業をやっていくと、(中略)しつかりと自己紹介をしたわけでもないのに、いつの間にかお互い名前を呼び合うようになっていた。名前を呼び合うことによって、距離も縮まり話しやすくなった」と、コミュニケーションの大切さに気付いた意見もありました。

里地里山の現状をこれからも注視していきたいと考えています。

(いすみ けいこ・本学社会学科

環境・コミュニケーション創造専攻教員)

夏のねたいり山の実習から

■西 教生

2011年9月5〜8日までの4日間、都留文科大学の裏にある「ねたいり山」でおこなわれた実習に参加しました。実習の内容は調査地の測量と測樹ですが、下草を刈って道を作るところから始まります。まず、刈り払い機とカマを使って山頂までの道を作り、その後は測量をするグループと、調査区を示す杭を探すグループに分かれて作業をしました。調査地は山の斜面で、低木やササが繁茂していますので作業は思うように進みません。それでも参加者が多いため、初日の昼前からは測量を開始し、山頂までの道も確保できました。

2日目以降は適宜下草刈りをしつつ、測量と測樹をおこないました。測樹は胸高直径5cm以上の樹木を対象に、種名、胸高直径、樹高、その木の生えている位置などを記録していきます。この調査をすることで、調査地にはどのような樹木がどれくらい生えているのかがわかります。また、定期的に記録を取っていくと、林の動態が明らかになってきます。たとえば、アカマツの枯死は山梨県の山ではよく目にしますが、アカマツが枯れた後にはどのような樹木が優占するのか? その過程にはどのような現象が見られるのか? この実習を続けていくことで、こういったことも見えてくるでしょう。

今回の実習中、アオキやヒイラギナンテン、イヌツゲやマメガキなどを発見しました。これらは近くに親木がないことから、動物によって運ばれた種子

がここで発芽したものと思われます。植生を考えるさい、動物の影響というのは軽視できません。それに、ヒイラギナンテンなどの外来種が山のなかに生えている現状をどう捉えていくのか。実習はたんに实地に触れるだけではなく、このような問題を考えるに機会にもなります。

大学のすぐ近くに実習のできる場所(フィールド)があるというのは、とても恵まれていると思います。登山道を少し整備し、実習以外の活動にも利用できるようなになると良いと感じました。生きもののどうしの繋がりを観察し、経験を通して物事を理解していくための自然探索の場合は、身近にあるほうが何回も足を運べます。

(にし のりお・本学非常勤講師)



ねたいり山で見つかったヒイラギナンテンの稚樹



シモバシラの花



木の幹の長径を測る



道を作り、測量をす



第8回 地域交流研究フォーラム

地域交流研究センターの年間最大の行事として受け継がれております「地域交流研究フォーラム」も、第8回目を開催することができました。今回は、私たち地域交流研究センターにおける活動の柱の一つであります「フィールド・ミュージアム」活動の提案者でもありまた、本学の元学長であります、大田堯先生の、そのドキュメンタリー映画「かすかな光へ」を取り上げ、『大田堯先生とともに考える「生きる」こと、学ぶこと、そして未来へ…』と掲げたプログラムを組みました。

しかし、映画上映後の「大田堯先生をお迎えしての懇話会」ですが、大田先生の突然のお怪我のため、都留までの移動に大きな不安をもつこととなってしまいました。そこで、昨今のICT、通信技術の進歩の中、大田先生のご自宅と会場を結んだインターネット中継システムを利用することを考え、会場のスクリーンを通して、さいたま市にお住いの大田先生との交流をしようということになりました。

先ずは、映画『かすかな光へ』を基調講演として、鑑賞頂くことにいたしました。映画上映後には、初等教育学科の佐藤隆先生の司会により懇話会を開きました。ステージへの登壇者には、初等教育学科の西本勝美先生、山梨県富士・東部教育事務所の小川弘一先生、谷村第一小学校の渡辺正司先生、都留市社会福祉協議会の織田宗寛会長の4名の方々をお願いいたしました。そして、スクリーンを通して、ご自宅から大田先生にも参加頂きました。

(杉本光司・地域交流研究センター長)



生がおっしゃった言葉で、とても心に残りました。確かに、今の学校教育というのは、決められた課程をこなすことを主軸におかれているように思います。学問を学ぶ場として、それも重要なことだとは思いますが、人を育む場としての学校を考えると、もっと人の自ら変わろうとする力を信頼した教育の方法があるべきなのかもしれません。学長時代には学生を呼んで、ひとりひとりと話す時間をつくっていた、という話も劇中にありました。自身の言う、直に「かかわること」、人それぞれ「ちがうこと」、に応じた教育を、学長という立場になっても実行しようとしたことに感動し、教育に対する深い情熱をひしひしと感じました。

「長生きの秘訣は？」と聞かれ、笑いながら「私は夢に生かされているんだ。」と答えられていたのがとても印象的でした。93歳とは思えない、活力に満ちた姿を拝見することができました。

今後、社会に出て後輩を指導するとき、子どもを育てるときなど、人を導く立場になったとき、今回学んだことや大田先生の考え方を思い返すことができれば、と思います。

(おうち かすま・国文学科3年)

イネのちからに感動！ ―田んぼクラブ便り―

■ 西本勝美

今年度(2011年度)の「田んぼクラブ」はサークル活動としての運営が定着し、学生主体で昨年度にも増して意欲的な取り組みをしました。水苗代と一本植えです。

昨年度まで育苗は市の育苗センターに委託していましたが、今年は田んぼの一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる「水苗代」という方法を試みました。農村でもほとんど見られなくなった古い方法ですが、これを手がけることで米づくりの全行程をクリアし、苗の生長のようすや旺盛な生命力を実感することができました。



水苗代からの苗取りのようす



ロープに沿って一本植え

そして、通常の手植えの場合よりも大きく育てた苗を、タテ・ヨコ30cm間隔で1本だけ植える「一本植え」という方法で田植えをしました。イネは1本だけ植えても根元から分かれて(分けつ)20〜30本に増えるはずなのですが、田植え直後の見た目は貧弱で、「これで本当に分けつするのか、収穫できるのかな」と心配になったほどです。

結果は大成功でした。分けつはやや少なかったのですが、例年になく元気なイネに育ち、背丈も高く、茎も太く、なにより稲穂が長くなりました。もちろん、これが一本植えで期待する効果です。一本植えですつくと育ったイネは見た目にも美しく、毎年通りがかりに見ているという市民の方から「今年はいいね!」と声をかけていただきました。

水苗代と一本植えは、4月の半ばに中心メンバーで長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わって

ただいての挑戦でした。通常の手植えだと分けつのようなすがわがかりにくいのですが、今年は1本が20本に、また「一粒が千粒」になると言われているイネの不思議さと豊かさはつきりとつかむことができました。米づくりの工夫にも、イネという作物のちからにも感動させられました。「田んぼクラブ」の米づくりは深まり続けています。

(にしもと かつみ・本学初等教育学科教員)



「1・自分の命は自分で守る 2・助けられる人から助ける人へ 3・防災文化の継承」を目標として、具体的には、津波記念碑の調査や体験談を聞くフィールドワーク、津波を体感する学習、過去の教

釜石東中学校での防災教育の取り組みについて

釜石市は津波の常襲地域であり、宮城県沖地震が30年以内に99%の確率で発生すると予想されていたため、子どもたちや地域住民の命を守るため、防災教育の必要性を感じていました。子どもたちが地域の方々と防災について学び、津波に備えるのはあたり前という文化を形成していきたいと願い、学校の防災教育担当として、防災教育の企画・実践を行ないました。

「1・自分の命は自分で守る 2・助けられる人から助ける人へ 3・防災文化の継承」を目標として、具体的には、津波記念碑の調査や体験談を聞くフィールドワーク、津波を体感する学習、過去の教

「1・自分の命は自分で守る 2・助けられる人から助ける人へ 3・防災文化の継承」を目標として、具体的には、津波記念碑の調査や体験談を聞くフィールドワーク、津波を体感する学習、過去の教



支援先の大槌町での「コマづくり」の授業風景(右から三番目が筆者)

地域・故郷を思う

― 東日本大震災と私たち ― (続編)

前号(20号)で「地域・故郷を思う―東日本大震災と私たち―」を特集しましたが、本特集はその「続編」です。誌面は、第一に、本学卒業生による岩手県内での教育の取り組み、本学教員による釜石市調査の報告、第二に、本学における放射能測定、イラク戦争と福島第一原発の学習会、原発事故による福島県内の農業の苦悩、第三に、都留文科大学合唱団による被災地支援コンサート、被災資料洗浄のボランティア活動、「グラウンドワーク三島」とつないだ都留文科大学ボランティア活動、という三つのパートで構成しました。

前号で紹介したように、本学の学生たちが定期的にボランティアに通っている釜石市。そこで活動中の学生たちに声をかけてくださった「大先輩」が森本晋也さんでした。森本さんは、本学社会学科(地域史ゼミ)の第一期生。震災のちょうど一年前まで釜石東中学校で教えていらつしやいました。中学校では防災教育に力を尽くされ、釜石市の防災教育プログラムの作成メンバーもつとめられました。震災発生後は、半年近く、大槌町はじめ、複数の被災市町の現場で学校支援の仕事に携わり、支援物資・学習用品の受け入れ、学習環境づくり等に奔走なさってきました。そのご活動とお考えの一端を寄稿いただきました。

未来を担う子どもたちのために 震災を経験して、教育の原点を見つめ直す

■ 森本晋也

都留文科大学の先生方や学生の皆様には、岩手県釜石市や大槌町をはじめ被災した地域へ、多大なご支援を賜り、心より御礼申し上げます。ご支援頂いております釜石・大槌での経験や前任校である釜石東中学校で取り組んだ防災教育について述べさせて頂きます。

教育行政の立場での学校支援

発災時、私は内陸部にある一関市教育委員会に所属しており、初動では担当する学校の安否・安全確認や市内の避難所での対応を行ないました。そして、3月15日から3月20日までは、前年度まで勤務していた釜石市へ災害派遣として赴き、被

災した学校の子どもたちの安否確認や必要な物品の状況把握や手配等を行ないました。

4月から8月までは被災の大きい大槌町へ派遣となり、学校再開に向けての支援業務を中心に行ないました。大槌町は、小中学校7校中5校が被災しており、多くの校舎が使用できず学校再開が困難な状況でした。そのようななか、学校と教育委員会は、少しでも早く子どもたちの学びの場を確保するために、施設の確保、通学手段の手配、学習用品や教材等の確保など、教育環境の整備に奔走しました。

仕切り教室や他の施設を間借りする、決して満足な教育環境とはいえない状況下での学校教育の再開でしたが、子どもたちが集い、一生懸命挙手



地域・故郷を思う

―東日本大震災と私たち―（続編）

その後、宝来館は、地元の人々やNPO等と協力しつつ、2011年9月には「にわか漁師すっぺし！わかめボランティアツアー」を開催（本学の学生もその関連イベントに参加させていただきました）。

まるで、自らを奮い立たせるかのように、そうお話になって、また足早に仕事に戻っていかれる姿を見送りながら、私も、聞き取りに同行した学生・卒業生も少し驚きました。当時は、他県と比べ、岩手県の釜石地域では瓦礫撤去がなかなか進まないことが指摘されていて、撤去が進まないことが、その先に進むことを物理的にも、精神的にも難しくしている、という議論がありました。しかし瓦礫は、少し前まではこの地域の仕事や暮らしの構成物だったわけですから、復興のために一刻も早く取り扱うべきもの、という捉え方だけでは一面的であることを感じつつ、皆さんの、次の一歩への模索が、実に多様な思いの中で行なわれていることを知るところとなりました。

ただ、（海岸から離れて）町にいとそその力がなくなってきました。町にいて、借金のことや二重ローンのことを考えると…中略…だから日に一回はここに帰ってこなくちゃいけないんですよ。ここに帰ってきて、自分の気持ちと自分の力を確かめない」と。

気持ちが、自分の中ではなくて、この土地の力や空気というか、ここから力をもらって、またきれいな海岸を戻せるっていう力がわいてくるんです。

■「瓦礫の中にいたほうが、頑張れる」

1月の朝日新聞夕刊に「宝来館再開」の報がありました。この「宝来館」という宿こそ、震災後の諸活動の中で、私たちがお世話になり、また何かと通わせていただいた場所です。学生たちもここを拠点に、近辺の集落や海岸沿いで、瓦礫撤去や花植え、夏にはコンサートの開催をお手伝いをしてきました。同館は、もともと震災前から、漁

被災地における聞き取り調査から

前号で紹介した通り、都留文科大学の学生たちは、6月以降、ボランティア組織を立ち上げ、月一回、チームを組んで、被災地入りをしてきました。そうした活動の一部を、コーディネートしてくださっているのが、現地で、震災翌日から岩手県釜石市に支援拠点を設置し、活動が続いているNPO法人「ねおす」です。その「ねおす」のご協力で、3回にわたり、聞き取り調査にうかがわせていただきました。本稿では、そこでお聞きしたお話の一部をご紹介します。詳細報告は、『東日本大震災における、釜石市の人々の震災・被災・復興にむけた対応・考え方に関する聞き取り活動報告（第一次）』（企画・NPO法人「ねおす」、協力・都留こどもあそび／地域支援隊・NPO法人都留環境フォーラム、とりまとめ責任者 田中夏子、2011年7月）として、また、概要紹介は、田中夏子「震災発生直後の、人々の行動と考え方―釜石市における聞き取り調査から―」（都留文科大学社会科学部『地域社会研究』第21号、2012年3月）等を「参照ください」（なお「」内の（）は筆者による補足です）。

田中夏子

家や漁協と、山里の農業者とが連携して展開するグリーンツーリズムでその名前を知られていました。東京大学社会科学研究所の『希望学』でも大きく取り上げられた存在です。

私たちがお訪ねした六月は、すでに営業再開にむけて、関係者の方々が動き始めていました。お忙しい最中なので、その女将さんである岩崎信子さんにお話をうかがうのは、見合わせようと思っていたところに、ちょうど女将さんがいらして、一気に次のようなことをおっしゃいました。

「私はね、瓦礫の中にいたほうが、頑張れる。ここの中にあると絶対できるという思いがわいてくるんです。絶対できると。そしてできるという

した）、また10月には、海岸部から鵜住居川沿いの内陸部に設置された仮設商店街「鵜（う）の」！はまなす商店街」にて食事処「松の根亭」を開設。そして冒頭、述べたように年明け早々、本格的な事業再開を遂げ、6月にうかがった女将さんの「絶対にできるという思い」が、現実のものとなりました。

女将さんとともに宝来館の経営を支える伊藤聡さんは、昨年6月の時点でこうおっしゃっていました。「もともとこの宿は地域づくりと一緒にやっている、ちよつと変わった宿なんですよ。その目立ったところがグリーンツーリズム。地元の人たちと協力して、一緒に地域を盛り上げながら、宿も盛り上がっていく、そういうことをやってました」。そうした運営方針のもとで、伊藤さんも、宿の仕事はむろんですが、釜石の地域づくりの取り組みや、隣の大槌町を含む広域で、若手が集まって地域について議論したり、イベント開催をする等の活動を、震災前から重ねてきたと言います。宝来館の再開も、そうした震災前からのネットワークと、震災後に深まったネットワークとを活かしながら、地域の再生とともに進めていける、そう話してくださいました。

◇



地域・故郷を思う

― 東日本大震災と私たち ― (続編)

壮絶な内容のお話をうかがいながら、同行した学生の中には、「なぜ、語り手にとって、話せば苦しいお話を、こういう時期にあえて聞くのか」

◇

釜石市鶴住居地区では、3月11日の地震、津波の後、山側からは火事がせまっていました。一度、山側に避難した人たちは、そこからまた移動を強いられます。こうした移動の誘導後、三日目までかかって山火事の消火活動が続きます。津波の後、潮位が不安定となっている状況で、汲み上げ水もたびたび止まり、迫る火に巻き込まれる恐怖と隣り合わせの作業だったと言えます。それと併行して、生存者捜索のための瓦礫撤去や、消防団とは別に、集落の役員としての仕事もこなしながら、精神的にも肉体的にも高度の緊張長状態が続いていたことがうかがえます。

「火事や地震といえば、消防団は動かねばならないからさ、(消防団の)半纏着た以上は、人が何しようが、家族が何しようが、行かねばならないうってことだ。俺も家族の安否が当日はわからなかった。安否がわかったのは四日目。ただ、生きていたとわかって、それから三日はあえなくて、会えたのは一週間目だった。(消防団として)上に立って、指示を出していれば、自分の家族とか心配していても全然、そっちのほうに気がいかねえのさ」。

■『てんでんこ』とは逆の行動を求められる

被災地では、こうした地域の力強さを教わる場面が多々ありますが、同時に災害の大きさ・厳しさを思い知る場面も少なくありません。いえ、その方が圧倒的に多いといえましょう。仮設住宅にうかがうと、居間が手狭なだけに仏壇の存在感がひととき大きく感じられ、そこで御身内を亡くされた方のお話をうかがうこともありました。

また、今回、特別にお願いをして機会を作っていたのが、消防団として活動なさっていた方々のお話です。3・11の震災では、消防団員が被災三県で254名、犠牲になったとされています(岩手県はそのうち119名、釜石市消防団の犠牲者数は、14名(同市の団員数は795)。消防団とは、特別職地方公務員(非常勤)で、通常は別に仕事を持ちながら、地域防災、水火災・地震での「災害防除」に勤める組織です。佐々幸雄さん(釜石第六分団副団長)も、普段は漁業(定置網)をなさっていて、3月11日は、春からの漁業の準備をなさっていました。消防団員としての立場の厳しさを次のように語っていました。

「津波のときは(津波でんでんこ)(自分のことは自分で守るの意)というんですけど、これまた消防団というのは、それができないわけです。自分だけ助かるんではなくて、地域の生命と財産を守る、老人、病気の人を助けなければってことで

やってるから、自分だけ助かるうって気はさらさららない。だから避難する住民と避難させる消防団とは、逆の行動になるわけです。消防団になった時点でそれは認識していると思うんですけど、まさか(消防団から)こんなに亡くなる人が出るなんてことは想像もしていなかったです」。

「消防団の半纏はんてんを着た以上、(てんでんこ)はできない」といった言葉は、テレビ等でも報道されるところですが、しかし佐々さんは、同時に、部下の命を預かる立場として、「(救出作業によって救出側が犠牲となる)二次災害は絶対に出せない」ことも強調なさいました。震災発生の夜、佐々さんは消防団員と海岸線の見回りに行き、そこで漂流していると思われる人の声を聞いたといいます。

「(助けを呼ぶ声が)だんだん遠くなって。助けなかった。本当にあの時は苦しかった。部下四人と海岸まで下がって、頑張れ、頑張れと言っていたんだが、部下の一人が自分が行くと。いや、津波から助かった命だから、ともかく行くなど、二次災害は絶対出せない、行くなと引き留めたんだが、それがよかったのかどうか…」。

自らは危険に向かいつつ、ともに行動する部下の同じ思いについては、それを強力に制止しながら地域の生命を守る、そうした葛藤の大きさ、任務の重さに、圧倒される思いでお話をうかがいました。

疑問を持つ者もいました。私もその学生の疑問に、答えることができました。むしろ、この聞き取りは「地震発生からこれまでの、みなさんの大変なご経験やご苦労についてお教えいただき、それらを、この地域で共有の財産としていただきながら、これからの地域づくりに活かすための資料づくり」という調査目的があるのですが…。

その後、佐々さんとお電話でお話をした際、「あの記録ですがね、関東に出ている子どもたちに送りましたよ」とおっしゃっていたきました。さまざまな場において、最も厳しい立場で動かれた方々のお考えと行動を、より多く記録・記憶し、苦しい思いも含めて、地域で共有していくことが現在の重要な課題であると再認識しているところです。

(たなか なつこ・本学社会学科)

環境・「ミニミニ創造専攻教員」

注1・データは、東日本大震災を踏まえた大規模災害時における消防団活動のあり方等に関する検討会「消防庁資料(平成23年)より引用」
http://www.fdma.go.jp/disaster/syobodan_katudo_kento/01/shiryo_08.pdf





科学的知識と原発事故の実態に関する講演を行ないました。更に、環境放射能の測定に適した線量計を購入し、物理ゼミ生3名の卒論研究のテーマとして継続的測定を開始しました。以下は、彼らのデータに基づく推論に私の考えを加えたものです。

線量測定は自然科学棟前の地上約1mの高さで、基本的に毎日、朝昼夕の3回行われました。放射線は確率現象であり、個々のデータのバラツキは非常に大きいので、一か月毎の平均で見ることになります。4月の平均値は約0・12μSv/h、1時間あたり0・12マイクロシーベルト)で、年間に直すと1・05mSv(ミリシーベルト)になります。国の基準では、汚染の目安となる値は年間1mSvですから、やや高め of 測定値といえます。しかし、福島事故以前の記録がないので確定的なことは言えません。測定値はその後、夏にかけて0・09μSv/h程度に低下しますが、秋に入ると再び上昇を始め、11月には0・11μSv/hに達しています。このような傾向はどのように理解できるでしょうか？まず、福島発の放射性物質が、どれだけ、どのように放出されたかに注目する必要があります。放出総量は広島型原爆約30個分に相当し、その大部分は事故発生の数日後に起こった水素爆発とともに外部に放出されたと言われています。この数日の時間差は、大変重要な意味を持ちます。広島では放射性物質は爆発の瞬間に放出されたわけですから、半減期のごく短い短寿命の放射性物質を大量に含みます。しかし福島 of 放出では、数日間 to かなりの短寿命放射性物質が崩壊したために、長寿命の放射性物質を相対的により多く含みます。半減期30年のセシウム137でいうと、福島原発からの放出量は、広島原爆約160個分にあたるそうです。そのために、原爆放射能は1年で

1000分の1に低下するのに、福島由来の放射能は10分の1程度にしかならないのです。福島原発からのこれほどの大量放出も、原子炉内の放射性物質のごく一部でしかありません。この程度で済んだのはかなり偶然的であつたとも言われています。「東日本全域の福島化」の可能性も十分あつたわけですから、福島からの放射性物質は、大部分が水素爆発時に一気に放出されたもので、現在に至るまでだらだらと続いているわけではありません。我々のデータにおける4月以降の測定値の低下は、ヨウ素131(半減期8日)などの比較的短寿命の放射性物質の崩壊・減少によるものと推定できます。夏以降の線量を支配しているのは長寿命のセシウム137等であると考えられます。それらは雨によって移動します。(実際、雨の日の線量は晴れた日より大きいことが確認できています。)漠然とした推定ですが、秋にかけての線量の増加は、そのような移動によるものかもしれません。我々の測定は1地点のみでなされましたが、そもそも、放射能汚染は場所所です。まだらであることが大きな特徴です。より明確な結論を導き出すためには、大学なり都留市のさまざまなポイントでの測定が必要です。上記のような大量の放射性物質が放出されたわけですから、都留にもその影響は及んでいいると考えるのは自然ですが、それに関する具体的結論はデータに基づく科学的分析に基づかねばなりません。今後、理科教室として取り組んでいただくことを期待しています。

ところで、上記学生の一人が、昨年11月中旬、通行途中の福島県本宮市の高速道路のSA内で放射線量測定を行なつてみたところ、いきなり都留で慣れている値の6倍が記録されました。測定地点は福島原発からは直線で約56km、避難区域のはるか外で

す。このデータ一つから一般的結論は出せませんが、福島県内の汚染状況の深刻さを実感はできます。この測定値は年間6mSvに対応し除染対象の基準値をはるかに超えています。ただ、この程度ならCTスキャンで照射されるX線量以下であり「直ちに健康への影響はない」と言う学者もいるでしょう。高エネルギー放射線は細胞内のDNAを壊し癌細胞化の原因になりますが、人体はそれを修復する機能を2重3重に備えています。実際、低レベル放射能の被曝が将来の癌の原因となる確率はごく小さいことが分かっています。しかし被曝のルートは、種々の環境汚染から、そして食物連鎖を通じて、と複合的であり、確率が体内で加算されて行くことを忘れてなりません。一つ一つの被曝要因をなくす努力によって確率は低く保たれるということです。

ガイガーカウンターで計測すると、放射線粒子が通過した際に音がカチとなります。自然放射能は1個2個と数えられる程度です。その6倍ともなればカチカチではなく、カカカカと高エネルギー粒子を浴びるわけです。その音を聞いたら誰でも不安にならざるを得ません。我々の脳が感じる危険信号でしょう。完全に無害であると科学的に実証されていない以上、危険信号の発生源から遠ざかることは生物が自らを守る自然な行動と言えます。

日本は原爆・放射能による大量殺戮を体験した唯一の国です。そして日本列島のほぼ全域は世界有数の地震帯に位置します。その日本が原発大国になり、そして「福島」を引き起こしました。そのことへの国民レベルでの反省感が希薄ではないかと危惧しています。

(やまもと やすお・物理学者、本学名誉教授)

チョココレートがつなぐ イラクと福島の子どもたち

講演会 「イラク戦争、フクシマと子どもたち」
(講師 佐藤真紀さん) を開催して

■ 佐伯奈津子

イラク戦争と福島第一原発事故。一見、無関係なふたつのできごとですが、実は平和を考えていくうえで重要な共通の問題をはらんでいます。地域交流研究センターは二月二日、日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-NET <http://www.jim-net.org>) 事務局長・佐藤真紀さんに、両地域での活動を中心にお話しいただきました。

二〇〇三年、イラクが大量破壊兵器などを開発・保有している強い疑いがあり、これらの兵器が国際テロリストの手に渡ることは大規模無差別テロを再発させる恐れがあるとして、アメリカが主体となりイラク戦争が開始されました。アメリカとの関係を重要視する日本もまた、人道復興支援の名のもとに、イラクに自衛隊を派遣しています。

しかしイラク戦争では、多くの民間人が被害を受けました。劣化ウラン弾によって、ガンになる子どもたちも少なくありません。JIM-NETは、ガンで死んでいく子どもたちへの治療だけでなく、絵を描くことを通じて、子どもたちの人生の質を高める活動に取り組んできました。「自分の絵が募金につながり、ほかの子どもたちを救えるなら…」と語っていた少女サブリーンは、眼のガンで亡くなりました。白血病に苦しんだ少女ハウラが、同じく放射能の被

害を受けた福島の子どもたちのために描いた赤い花の絵は、JIM-NETのバレンタインデーにちなんだ募金キャンペーンで使用するチョココレートのパッケージになつており、チョココレートの収益は、イラクの小児ガンの子どもたちへの医療支援とともに、福島の子どもたちを放射能から守る活動につかわれます。

イラク戦争は日米同盟、原発はエネルギー安全保障と、どちらも日本の国益と密接に関わっています。しかし国益とは、誰のための利益なのでしょう。国益のためなら、「弱者」が切り捨てられていいの

都留文科大における放射能測定

■ 山本安夫

2011年3月11日に発生した東日本大震災によつて引き起こされた福島原発事故はチェルノブイリ原発事故に並ぶ史上最大級の事故でした。事故発生から一週間ほどして、私は理科教室にある実験用のガイガーカウンターを自宅(八王子市)に持ち帰り放射線量の測定を始めました。3月21日から数日

間東京地方に降り続いた雨とともに線量はぐんと上昇し、放射性物質の飛来を実感しました。浄水場で放射性物質が検出され、ペットボトルのミネラルウォーターが店頭から消えた頃です。4月に入り、自然科学実験・観察(初等教育の全1年生対象)のオリエンテーションの時間を使って、放射能に関す



講演者 佐藤真紀さん

でしょうか。日本は、ヨルダンやベトナムなどへ原発輸出を計画しているほか、武器輸出三原則を変えようとする動きもあります。東日本大震災と福島第一原発事故を経験した日本が、復興してどのような国になるのか。わたしたちは真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。

(さえき なつこ・本学非常勤講師)



東日本大震災後に想うこと

■野崎陽子

私は、東日本大震災で大きな被害を受け、そして現在も受け続けている福島県の出身です。実家は福島県にあり、家族は農業を営みながら福島県で生活し続けています。今回、震災後に想っていることを書かせて頂く機会を頂きました。ですが、私の中でも未だにさまざまな思いや葛藤が交錯しています。そのため、まとまりのない文章になってしまおうと思いますが、私が現在感じていることを正直に書きます。

震災後の原発事故の直後、私の実家では出荷前の野菜のほとんどを処分せざるを得ない状況に追い込まれました。何カ月もかけ、丹精込めて育てた野菜を自らの手で処分しなければならなかった両親や祖父母はどんなに切なく、苦しかったか。多くを両親は語りませんでした。が、「今年は、（野菜が）大きく立派に育って喜んでいたのにな」という、母がもらした言葉は今でも鮮明に覚えています。

その後、野菜や米は出荷できる状態になんとか戻りました。しかし、放射線の値に神経をとがらせながら生活している状態は未だ変わりません。そして私は、震災後に比べて放射線量が高い福島という場所での農業を続けることが果たして良いことなのかという疑問を持ち続けてしまうのです。実家は専業農家のため、農業で収入が途絶えてしまえば生活が成り立ちません。しかし、安心安全で美味しいものを

届けたいというのは農家の共通な思いのはずです。農業を、ずっと守ってきたこの土地で続けたいという思いと、安心安全なものを消費者に届けたいという思い。この二つの中で板挟みになっている福島県の農家の方は多いのではないのでしょうか。私の両親はこれからそうした疑問に正面から向き合うことを迫られるのかもしれない。ただ、これからもずっと続くと思うていた生活が急に変ってしまった現実から目を背けたくなる気持ちも十分に理解できます。

しかし、そのことに向き合わなければ前には進めないのかも知れないとも思います。地震や津波、原発事故において甚大な被害を受けた地域や方々と比べると、実家が受けた被害は小さなものです。それでも、確実に痛みや葛藤があります。そして、震災から10カ月が過ぎた現在もその痛みや葛藤は何も終わっていないと私は感じるのです。

私自身は少しずつ今の福島の現状に向き合わなければと思えるようになりました。福島について考えるワークショップに参加するなど少しずつアクションを起こしていますが、その度に福島が直面している問題の大きさに目を背けたくなるのです。原発について知りたいと思っても、あまりの情報量の多さに何を信じればいいのか分からなくなり、混乱する

状況が続いています。それでも私は、これからもどんな形であれ福島の再生にずっと付き合っていきたいという思いだけは変わります。そして、まだ何も終わっていないことだけは多くの方々へ声を大にして伝えたいのです。まだ何も終わっていません。終わらせてはいけないと思うのです。

（のざき ようこ・社会学科
環境・コミュニティ創造専攻4年）



取引き停止となって、処分せざるをえなくなったビニールハウス内のレタス

本学合唱団が被災地支援コンサートを行なう

■清水雅彦

都留文科大学合唱団は、大学同窓会宮城県支部の「被災した児童・生徒や地域の方々の心を癒し、夢と希望をもって力強く生きていこうとする心に、灯をともして欲しい」という要請を受け、2011年12月17日、18日の両日、宮城県山元町立山下中学校、石巻市立東浜小学校に於いて、被災地支援のためのクリスマスコンサートを開催してまいりました。これは大学と同窓会の被災地に向けたボランティア活動の一環としても位置付けられ、全日本合唱コンクール全国大会に於いて3年連続金賞を受賞している合唱団にとっても、〈音楽が人の思いを繋ぐ〉ことを再認識できた貴重な2日間でした。今回、多大なご尽力を頂きました同窓会宮城県支部の皆様、そしてご協賛いただいた多くのボランティアの皆様、全面的にバックアップしてくださった大学、同窓会、合唱団OB会に、この場をかりて厚く御礼申し上げます。

（しみず まさひこ・本学初等教育学科教員・大学合唱団顧問・指揮者）

遠い地に思いを馳せて

■石川あゆみ

「被災地でコンサートを」とお声を掛けて頂いたとき、私は本当に嬉しく思いました。震災から今日まで「被災地応援」をテーマに活動してきた私たち合唱団にとって、被災者の方々に歌声を届けられる機会を頂いたことはとても光栄なことでした。不安が全く無かったわけではありません。被災地へ実際に赴くのは初めてでしたし、何より被災した方々の悲しみ、苦しみは計り知れません。私たちに何ができるだろう。そう考え、浮かんできたキーワードは「心からの笑顔」でした。私たちの音楽で、被災者の方々の心を芯から温められるような、自然と笑顔になれるようなステージを作りたい。その一心で演奏しました。

涙を流して演奏を聴いてくださる方を見て、私自身も胸が一杯になり、本当に来てよかったと思いま

した。何よりコンサート終了後、沢山の方々に「ありがとう。」と声を掛けて頂いたことが、本当に嬉しかったです。「被災してから、どうしても『ふるさと』が歌えなかった。でも今日皆さんの歌声を聴いて、昔の故郷の姿を思い出すことができ、一緒に歌うことができた。ありがとう。」と言ってくくださった方もいました。その時の皆さんの笑顔を、温かい言葉を、私は一生忘れません。被災地応援のステージでしたが、逆に沢山の元気と感動を貰いました。この経験は、きっと今後の私たち合唱団の力になると信じています。そしてまたいつか、被災地に私たちの歌声を届けられたらと願っています。

（いしかわ あゆみ・大学合唱団学生指揮者・

英文学科3年）



「ふるさと」を会場全員で合唱（指揮：石川あゆみ）



決めのポーズ（アンパンマンのマーチ）



地域・故郷を思う

— 東日本大震災と私たち — (続編)

11月には、株式会社富士フィルムの全面的協力を得て、被災地の写真を洗浄するプロジェクトを二日にわたって実施した。陸前高田市から送られてきた、津波で流されてしまった写真を洗って整理し、現地に送り返すというプロジェクトである。じつさいには、震災から半年近く経ってしまっていたこともあり、損傷がかなり進んで救うことができなかった写真もかなりの割合を占めたが、1000枚近くの写真を現地に返送することができた。このプロジェクトでは「被災地には行けなくても出来ること」を提

案・実施することができ、参加した学生たちの満足度も高かったようだ。

しかし、「ボランティアセンター」が上記以外に実際に行なうことができたのは、用具の貸し出しと部分的な情報提供にとどまった。スタッフとなった学生たちはそれらの運営は真面目に行なったものの、自発的な企画や提案は結局ほとんど出てこなかった。被災地ボランティアについての知識・経験の不足もあるが、やはり動機づけの部分で限界があったように思う。また、他大学との連携・協力等を考えようとする際には都留というロケーションのハンディを痛感した。

来年度以降は、実際に被災地ボランティア活動の実施や企画を行なったことがある学生たちがボランティアセンターに積極的に関わり、都留独自の企画をつくっていくようになることが望ましいと思う。

(ひらばやし ゆうこ・本学社会科学部 環境・コミュニティ創造専攻教員)



東日本大震災津波被災資料 デジタル化レスキュー

■ 日向良和

東日本大震災で壊滅的なダメージを受けた、岩手県陸前高田市立図書館、大槌町立図書館に残る津波被災資料について、本学非常勤講師小林是綱氏と私が関わるNPO地域資料デジタル化研究会が中心となり活動が始まりました。

今回のボランティアは都留でできる被災地の力になれるボランティアということが特徴だと思います。陸前高田市や大槌町に、震災前どんな暮らしがあったのかを知るための、記録が残っていければいいと考えています。

ボランティア活動は現在継続中です。詳細は情報センター日向(ninata@tsu.u.ac.jp)まで、お問い合わせください。

(ひなた よしかず・本学情報センター教員)

参加学生の感想です。

国文学科4年 榎間さん

山梨で砂を払った被災地資料の中に何年か前の広報があった。広報の写真には学校があつて、子どもたちがいた。この学校は津波で流され、彼らの中には亡くなった子どももいるだろう。そう思った途端、まるで、遠い場所のように感じていた東北が鼻先に迫り、一枚の紙切れが重さを持った。

社会科学部現代社会専攻3年 斉木さん

東日本大震災発生後、瓦礫撤去や炊き出しなどの被災地で行なうボランティアがメディアで取り上げられ、世間の関心を集めていた。確かに、これらの活動は被災者の日常生活を取り戻す上で必要不可欠だ。だが、小林先生、日向先生の講義がきっかけとなり資料修復ボランティアに参加し、海水や砂を被った資料に触れた私は、「被災したのは被災地の人々だけではない」と知った。この活動は今しかできない、被災地の過去の記憶を未来に遺す活動ではないだろうか。

比較文化学科3年 北村さん

授業でボランティアの呼びかけがあるまでは、「被災地のために何かしたい。でも、バイトを長く休むと私の生活費がなくなってしまう。」という思いでもやもやしていました。しかし、山梨にいたまま被災地の役に立てるボランティアの話を聞いてとてもうれしかったです。後方支援のようなボランティアが増えていけば被災地のためにできることも増えていくのではないかと考えるようになりました。

比較文化学科3年 山崎さん

ボランティアを行ないたいという気持ちはあるが、遠い道のりを考えると手がだせない。それが7月の私だった。しかし10月に入り、私たちの大学図書館でボランティアができることになり、私は今までやりたいと思っていたボランティアを行なうことができました。目の前の資料の土払いをしていると、その資料に「遠いところまでよく来たね。」と言いたくなる。

なお、本活動は『学報』第117号2〜3頁に、その詳細過程が掲載されています。(編集部)



本学非常勤講師、小林是綱氏



大学での資料清掃作業



被災児童と家族の心の支援を

都留文大生と展開

■ 渡辺豊博

私関わっている、NPO法人グラウンドワーク三島は、静岡県三島市に拠点を置く環境NPOであり、20年間にわたって、多様な環境改善活動を実践してきました。「阪神・淡路大震災」においては、行政と市民・企業などの支援を受け、2500本のペットボトルに三島の水道水を1人1本ずつ注入してもらい、さらに、2500人分の豚汁を市民総出により数箇所の公民館にて料理し、神戸市長田区にある御蔵小学校の避難所において、被災者の皆さんに美味しい富士山の湧水と温かい豚汁を配り、大変、喜ばれました。

また、私自身も約50日間にわたり、被災地に常駐し、避難所のボランティアリーダーとして250人のボランティアの取りまとめと避難所の総括的な調整・運営・管理を担当しました。さらに、精神的なダメージを受けた被災孤児5人をグラウンドワーク三島で受け入れ、寂しく、傷付いた心のケアを目的として2週間にわたり、仲間たちの家でホームステイしてもらい、その結果、元氣を取り戻し、現在でも、人間的な付き合いを続けています。

このような経験知を踏まえ、今回の東日本大震災の発生を受け、4月上旬から5回にわたり、いま最も必要とされる支援活動とは何なのかを確認するために、石巻市からいわき市までの各地の避難所を回り、直接

的に被災者からの要望を聞き取ってきました。

その中で、被災家族の共有した要望としては、元氣を失った被災児童の「心のケア」に対する具体的な取組みでした。私が避難所で出会った多くの被災児童も、普段の元氣を失い、はしやぎ、飛び回る姿はほとんど見かけず、何か心に重荷と深い傷を背負っているかのように感じました。その後も、被災児童への具体的な悪影響が現実的な形で現出し始め、いじめや引きこもり、非行の増加など、被災児童の心を蝕む、さらに厳しい現実が加速度的に深刻化していると実感しました。

そこで、グラウンドワーク三島では、大震災による影響を最も強く受けている被災児童の「心のケア」



石巻少年少女合唱隊を励ますコンサート
(みしまプラザホテル)



心を元気にするショートツアー
(源兵衛川生き物探し)

学習支援活動を実施しました。最初は、先生役の学生と子どもたちとの意思疎通がうまくいかず、戸惑いもあつたようですが、遊びやゲームを取り入れたりして相互に打ち解け、遅れた勉強の部分が理解され、不安が払拭され、お互い同士の心の絆・信頼関係が創られたようでした。

これらの2つのツアーと寺子屋教室には、すべて、都留文科大学の学生が延べ70人以上も参加しており、随行者や先生役として活躍しています。子どもたちの遊び相手になり、彼らの悩みや苦しみを上手に受け入れる聞き役に徹していました。時には、優しく、時には、お兄さん・お姉さんとして、適切な助言と励ましのメッセージを送っていました。目の前で両親が津波でさらわれていった、悔しさを懸命に話す小学生の女の子の話を真剣に受け止め、必死に涙をこらえ、懸命に励ましている都留の学生の姿は忘れられません。

人間は人の苦しみや悲しみの思いを受け止められなくては大人として成長できません。傷付いた子どもたちの思いを真摯に受け止められる強い意思と心をもつことの大切さを実感できたと思います。生きた社会学は、まさに、人と人との現実的な厳しい付き合いの中にあります。「共助」の仕組みは、弱者を思いやる「優しさ」の仕組みです。被災児童との何気ない会話や付き合い、遊びの中から、自分としての社会的な役割と立場が、醸成されていきます。

現在、口コミ効果により、今後、約1万人もの被災者が招待を希望しており、実現には、約2億円の資金が必要になります。行政とは違う、市民目線の新たな人間的な震災支援活動の展開を目指して、今

後とも、都留文科大学との連携を強化し、持続的な活動を展開していきます。4月以降は、石巻市に「子ども陽だまり・心のケアセンター」を開所します。宿泊することもできますので、都留文大生の継続的な支援・参加を期待します。

以下、「子どもを元気に富士山プロジェクト」に参加した、学生の声を紹介します。

(わたなべ とよひろ・都留文科大学
社会学科環境・コミュニティ創造専攻教員・
NPO法人グラウンドワーク三島事務局長)

石巻少年少女合唱隊との出会い

都留文科大学社会学科
環境・コミュニティ創造専攻3年 中込晴香

2011年12月23日。私は静岡県で行なわれた「石巻少年少女合唱隊を励ますコンサート」に参加しました。何か被災者の方々の役に立てることをしたいと考えていたので行くことにしました。会場に着くと既にリハーサルが始まっており、私も含めた都留文科大学からの参加組はNPO法人グラウンドワーク三島のスタッフに混ざって会場準備等を手伝いました。そうこうしている間もリハーサルは進み本番。静岡の時之栖少年少女合唱団と石巻少年少女合唱隊が交互に発表をし、最後に「ふるさと」を全員で歌ってコンサートは幕を閉じました。

を支援するために「子どもを元気に富士山プロジェクト」を立ち上げました。

これまでに、「心を元気にするショートツアー」を10回実施して、宮城県石巻市、福島県いわき市などの被災児童約600人を、三島の水辺や伊豆の温泉に、2泊3日で招待してきました。被災地から離れ、水辺での遊びや温泉に入つてのリフレッシュ、支援ボランティアとの何気ない会話を通して、疲れた心身が癒され、元氣と笑顔が劇的に蘇っています。

また、被災者の夢であつた「富士山に登りたい」を実現するために、「富士山に登って元氣になろうツアー」を企画して、約90人が憧れの「富士登山」に挑戦しました。富士山の影響力は絶大であり、下山後は、皆、晴々とした顔つきをしており、強い元氣の風と勇氣をいただいたと大変喜んでくれました。

さらに、「大学生出前寺子屋教室」を石巻市門脇中学校といわき市久之浜地区集会所で、それぞれ1回ずつ開校し、60人の先生役ボランティアと延べ110人の子どもたちが参加して、2日間にわたる

石巻少年少女合唱隊は「くるみ割り人形」のオペレッタを披露してくれました。緊張もあつたと思いますが、私にはどこか時之栖の子どもたちに比べて表情などが硬く、何かが払拭できていないような印象を受けました。今回のイベント参加を通して、震災支援活動といっても様々な形態があることを知りました。建物などのハード面は時間が経てば戻っていくものです。しかし、ソフト面は、時間が解決するのを待っている生涯をかけることもあるかもしれません。物的支援はもちろん重要ですが、人間の内面的な「心のケア」こそが、一番大切なことなのかなと強く感じました。



富士山に登って元氣になろうツアー
(宝永火口登山体験)

子どもたちの笑顔から 支援のあり方を考える

都留文科大学生会
環境・「コミュニティ創造専攻3年 中島拓哉

被災地支援といえば、支援物資やガレキ撤去をはじめとした現地でのボランティアが主な活動と思っていました。しかし、今回、私が参加したグラウンドワーク三島の被災地支援活動は、石巻市、いわき市の方々の「心を元気にすること」が目的であり、その大切さを強く感じる体験となりました。

私は、今まで、グラウンドワーク三島の活動に3回参加しました。そのなかで共通して感じたのが、被災された方々の顔がだんだんとやわらかい笑顔に変化していくことです。とくに、子どもの表情の変化は大きかったです。

最初はどうしても、慣れない土地、初めて会う人がいたためか、どこか顔もこわばっています。ところが、三島をはじめとして、伊豆などとともに同じ時間を過ごすなかで、次第に心が通うような会話ができ、笑顔が生まれました。

被災地から来られた方々は、多くの辛く悲しい経験をされています。その一面も垣間見えたが、そのようななかでも、同じ時間を笑顔で過ごせたことが何より嬉しいことでした。石巻、いわきの方々から、「静岡に来てみなさん（私たち）に会えてよかった」との感想を聞いたときには、胸が熱くなる思いでした。

私は今後とも、石巻市やいわき市の方々と再会し

て、そこで、また笑顔ある時間をともに過ごせたらいいなと考えています。

被災地支援活動に参加して

都留文科大学生会
環境・「コミュニティ創造専攻2年 菰田翔子

私は、昨年の春、グラウンドワーク三島の企画した被災地支援活動「寺子屋教室」に参加させていただきました。震災による授業の遅れを取り戻すために、被災地の小・中・高校生を対象に一緒に勉強をするというものです。また、食事や休憩時間を共に過ごしコミュニケーションをとる中で、子どもたちの抱える心の傷を癒そうという趣旨のものでした。

最初は、被災地の子どもたちとどう接したらいいのか、傷をえぐってしまうのではないかと、難しく考えていましたが、ストレスのせいか子どもたちは想像以上にパワフルで、正直なところ子どもたちのために何かしてあげようなんて考えている間もないくらい、私自身子どもたちと過ごす時間を楽しんでいました。これで良いのかな、という不安もありましたが、時間が経つと、子どもたちの方から家族のことや震災の時のことを話してくれました。自己満足なのかもしれませんが、その時、私はこの活動に参加して良かったと感じました。

この経験を通して、自分の会話力の未熟性や学習支援の経験不足を実感したことから、今後の大学生活の中で、しっかりと学習し、また、これらの支援

活動に長く参加したいと考えています。

グラウンドワーク三島の支援活動を通して人との関わりを学ぶ

都留文科大学生会
環境・「コミュニティ専攻3年 吉野大地

私は、グラウンドワーク三島の支援活動を通じて、人と関わることで自分に変化し成長していることを実感できました。グラウンドワーク三島は、地域の方々をも巻き込み活動しています。そこにはさまざまな考えをもつ人がいて、そのなかに自分も参加することで意見を吸収し、今まで考えつかなかったアイデアが浮かんでくるようになりました。

また、グラウンドワーク・インターンシップに参加している人たちのエネルギーやパッションには驚きました。グラウンドワーク三島は、内閣府「地域社会雇用創造事業」の事業者として、今までインターンシップを行なってきました。そこで出会った人たちは地域をどうにかして元気にしたい！なにか自分も地域のために出来ることはないのかと考えている人ばかりでした。そんな人たちに関わり、さまざまな意見や考えを参考にするなかで、私も地域のためになにかできることがあるのではないかと思うようになりました。

私は都留市出身なので、大学と地元都留市が関わることで、まちが元気になる具体的な方法を、残り一年の大学生活で見つけ、発展させていきたいと思っています。

トピックス



第14回「南都留地域教育フォーラム」を終えて

■ 立川 博

今年も南都留地区から300名以上の子どものために関わる各種団体の方々にご参加いただき、南都留地域教育フォーラムが開催されました。今年で14年目を迎えるこのフォーラム、『子どもたちの教育は地域全体で担う』をテーマに、7つの分科会において子どもたちを取り巻く今日の課題について議論が交わされました。

分科会に先立って行なわれた全体会では、「光つ子コンサート」として、西浜中学校生徒による「双龍太鼓」が披露されました。躍動感と迫力のあるすばらしい演奏は、聴いている人々の心を打ち、会場にはわれんばかりの拍手が鳴り響きました。伝統を代々先輩から引き継いでいる和太鼓演奏からは、太鼓を通して学校づくり、人間関係を学んでいる生徒さんたちの様子が感じられました。

その後行なわれた分科会では都留文科大学生からも多くの先生方に助言者としてご参加いただき、さまざまな立場からの提案と活発な意見交換が行なわれました。簡単にその内容をご紹介します。

第1分科会（幼・保・小部会）では、「幼保小の接続（新たな接続の視点）」というテーマで、保育園・幼稚園での課題を小学校へどうつなげるか、それぞれの立場からの新たな連携や実践を踏まえ

て、なめらかな接続について話し合いました。

第2分科会（小・中部会）では、中一ギャップにスポットをあて、中学校とスクールソーシャルワーカーの立場から、子どもたちのよりよい成長の支援の仕方を探りました。

第3分科会（中・高部会）では、自分の住む地域を知り、世代を超えたさまざまな人々との交流により、子どもたちの地域を支える心を育てるということについて議論を深めました。

第4分科会（小・中・高児童生徒部会）では、「地域の中で体験を通して育つ子どもたち」というテーマのもと、「地域の活性化」そして「地域で子どもたちを育む」この2点をキーワードに子どもたちの学びを考えました。

第5分科会（行政・地域・学校部会）では、「地域が子どもを成長させ、子どもが地域を発展させる」と題し、多くの人々との関わりの中で子どもたちが生き生きと活動することの大切さや有用性について話し合いました。

第6分科会（特別支援部会）では、子どもたちの進学時の課題に視点をあて、特別支援教育の「現状」

とこれからの「進むべき方向」について確認しました。

第7分科会 PTA部会では、多くの保護者の方にご参加いただき、PTAとして子どもたちを守り育てていくために、できることは何なのかという視点で意見を出し合いました。

これらの話し合いは、南都留の豊かな地域教育を推進するための大きな原動力となり、また、子どもたちの健やかな成長への具体的な連携のあり方のヒントとなりました。このフォーラムが、明日への行動につながるものと信じています。

（たちかわ ひろし・山梨県富士・東部教育事務所
地域教育支援スタッフ主幹）

本学の助言者は次の通りです。

- 第1分科会・初等教育学科教員 筒井潤子
- 第3分科会・社会学科教員 泉桂子
- 第4分科会・初等教育学科教員 西本勝美
- 第5分科会・社会学科教員 前田昭彦
- 第7分科会・情報センター教員 杉本光司



市立図書館と都留フィールド・ミュージアムの連携事業

読書週間企画展示

谷の町・史の里

図書館の活動をささえる人びと

～大正から今日まで、地域の活動紹介～

企画：都留市立図書館

協力：都留文科大フィールド・ミュージアム

会期：2011年10月28日～11月9日

場所：都留市立図書館閲覧室

秋の読書週間恒例、「谷の町・史の里企画資料展」が2011年も開催されました。今回は、読書週間期間中の10月28日、市立図書館がある都留市文化会館に於いて「第26回（平成23年度）山梨県図書館大会」（※1）が開催され、県内各地から参加した図書館関係者の方々にも展示が紹介されました。

2011年の県図書館大会は、東日本大震災を機に私たちが痛感した地域の絆や、人と人とのつながりの大切さを、図書館や読書から考える大会として、「つながり地域、今考える読書の力」を大会テーマに開催されました。谷の町・史の里展もこれに呼応して企画され、戦前・戦後地域の読書推進を支え、

読書のすそ野を広げてきたまちの人びと、そして現在子どもたちに読書や図書館の楽しさを伝えている読み聞かせボランティア等、12の団体・機関等の活動が、図書館に残る記録や資料、写真を使って紹介されました。都留フィールド・ミュージアムは、企画立案に参加し、また日頃の展示技術を活かして、写真パネルやキャプションボードの作成に協力しました。

（取材：フィールド・ミュージアム部門）

〈展示リスト〉

- 1・大正初期の「床屋文庫」と南都留郡谷村町民「理髪店で本の貸出」
- 2・昭和2年、町民の手による「谷村図書館」設置をよびかけた葆光倶楽部（ほうこうくらぶ）
- 3・都留市立図書館協議会「昭和30・40年代、現在の図書館の基礎を築き「市民レコードコンサート」や読書会を通じて図書館を市民の（ための）図書館」に
- 4・昭和50年代、図書館の蔵書充実に貢献した都留市民の「献本運動」
- 5・昭和50年代「一坪図書館」運動に協力して地域の読書推進に貢献した人びと「たんぼぼ文庫」と都留大児童文化研究部の活動
- 6・都留文科大児童文化研究部「図書館子どもまつり」と「豆の木文庫」
- 7・都留市郷土研究会「郷土研究を通じて図書館の調査活動を支援」
- 8・ボランティアサークル「ひびきの会」「読み聞かせを通じて読書の楽しさを伝える」
- 9・都留市読み聞かせボランティア「こぶたの会」「おはなし会を通じて図書館の楽しさを伝える」

「いこいのひろば」の旅行に参加

■ 荒井翔哉

「何かボランティアがしてみたい」東日本大震災の後、こんな思いが私の心にくすぶり続けていました。そんなときに、サークルの先輩から障がいのある関係なく、地域に住む人たちが全員が楽しく充実して過ごせる地域づくりを目的とした、知的障がい者の余暇支援活動をおこなう「いこいのひろば」のことを知り、9月11日の沼津旅行に参加しました。参加者の皆さんの中には今回の旅行を心待ちにして、集合時間の1時間前には集合場所へ来ていた方もいたそうです。また今回の旅行には昨年度の卒業生も地元が沼津ということで参加して下さり、参加者の皆さんも大喜びでした。皆さん普段山梨では見ることができない海を身近に感じてはしゃいだり、干物などの海産物をお土産としてたくさん買ったたりしていました。

旅行中は、初めて接する参加者の皆さんに終始緊張して、「自分にできることを探さなくちゃ」と焦ってばかりいました。結局はほとんど何もできませんでした。しかし、帰りのバスで参加者さんたちに「また来てね」と笑顔で言われたとき、ボランティアとして参加していたはずの自分が何故か逆に勇気づけられ、楽しんでいるのに気づきました。そして同時にボランティアとは何かという問いに自分なりに答えを見つけることができました。

ボランティアは、確かに人助けや社会をより良く

していくための活動かもしれません。しかし、同時に自らを成長させてくれるものです。人間が支え合い無しでは生きていくことのできない理由がここにあります。

私がこの旅行で学んだことは、決して大学の講義を聞いただけでは得られないものです。単位のようなものでは量り切れない価値があります。この貴重な体験を、これからはより多くの人々に伝えていきたいと思っています。そして自らも人として成長するために、この活動が続けていきたいと思います。また、「いこいのひろば」では一緒に活動に参加してくれるメンバーを募集しています。毎週水曜18時30分から4号館2階で会議をしています。興味をもたれた方はぜひ一度のぞいてみてください。

（あらい しょうや・比較文化学科1年）



買い物体験でお土産を



10月28日には山梨県図書館大会の会場（市文化会館4階大ホール）で展示されました。



手前の額：昭和2年、町民による「谷村図書館」の設置をよびかける「葆光倶楽部」の趣意書（原本）（※2）

- 10・子育てサークル「こぐまクラブ」「おはなし会の活動と子育て交流」
- 11・都留文科大附属図書館「地域への大学図書館の開放、市立図書館との相互協力」
- 12・都留（文科大）フィールド・ミュージアム「市立図書館との協働による地域交流活動」

※1「第26回（平成23年度）山梨県図書館大会」山梨県公共図書館協会・都留市・都留市教育委員会ほか主催、都留文科大ほか後援

※2『地域交流センター通信』No.11(2007)「谷の町・史の里 図書館のあゆみ展」参照



編集後記

本号の内容と趣旨は、それぞれの特集冒頭のリード文、コンテンツをご参照いただければ幸いです。本号は二つの特集から構成されていますが、リード文にもあるように、両特集は別々の内容ではなく、関連しあう内容となっています。特集Ⅰでは「自然」「地域」「暮らし」を支える命の営みが、また特集Ⅱでは、その営みを危機にさらした震災・原発事故への私たちの向き合い方が、語られているからです。そして今泉吉晴さんの巻頭文はその両者を架橋する内容となっています。

「架橋」はそれぞれのパートでも、大小様々な形でなされています。昨年五月、本号特集Ⅱの執筆者の一人、野崎陽子さんのご実家（福島県白河市）にうかがい、原発事故による被害の様相を教えていただき、農場の見学をさせていただきました。ご祖父母がハウスの中で、実に立派な夏野菜の接ぎ木苗を丹精して育てていらっしゃる、その旺盛な生命の躍動が、原発事故の深刻さ・罪の深さを問わず語りに示しているようでした。（30頁）

ところで「地域」は「地元」だけを意味するものではありません。自分たちの地域の暮らしや命を大事とする思いは、同時に、遠い地に暮らす人たちの同様の思いと重なるところがあるはずです。そ

の意味で、特集Ⅱにある、佐伯奈津子さんにコーディネートいただいた学習会「イラク戦争、フクシマと子どもたち」は、原発の問題がイラクとつながっていることを示し、私たち自身が彼の地の子どもたちの生命を危機にさらすことに加担していないか、といった厳しい問いかけを持っています。（28頁）

さて、本号編集過程では、思いがけない出会いもありました。長年、釜石の中学校で防災教育に携わってきた森本晋也先生は、本学社会科学部の一期生。震災発生後、学校現場を支える立場での取り組みを書いていただきました。釜石で聞き取りをしていると、地域住民の皆さんから森本さんのお名前が出されることしばしばで、震災前から、学校と地域とが連携しながら津波や地震の学習を深めてきたことがうかがえます。（22～23頁）

同特集Ⅱでは、資料や写真洗浄等の活動はじめ、本学の合唱団による被災地コンサートや、本学教員が事務局長を務めるNPOを通じての被災地支援等、被災地との多様なつながりが生み出されつつあることを織り込みました。震災発生後、はやくも被災地以外での「風化」の懸念が出されつつありますが、息長く、被災地の「暮らし」の取り戻しに呼应した、

私たちの活動のあり方を模索していくための、第一歩となる特集となっていれば…そうした願いで本号をお届けします。

（田中夏子・副編集長）

前号の特集には、学生諸君の手記を中心に格別な反響がありました。その一つですが、「福島県からの自主避難者による講演」の記事に表れている教員・学生の探究姿勢に感銘を受けた、と綴られていました。ところで、「3・11」後の放射能の測定は都留文科大学でもなされています。山本安夫氏は放射能の測定値や意味、原爆経験のことを述べつつ、「…国民レベルでの反省感が希薄ではないか」と結んでいます（29頁）。

さて巻頭文執筆者の今泉吉晴氏は、北上山地の山小屋で「3・11」とその後の果てしない余震を経験しながらシートン動物記の翻訳をすすめています（シートン動物記『コウモリの妖精 アタラファ』童心社、2011年5月、の「あとがき」）。その全15巻の刊行が昨年11月に完結しました。シートンが残した記録と作品は、ヘンリー・D・ソローの作品とともに、私たちの地域交流研究の思想の源となるものです。

（畑潤・編集長）

絵・成瀬洋平（本学比較文化学科大学院卒業生）